

「セカンドステージ」は「継承と進化」。

開校10周年、相模原中等教育の新たな歴史が始まる。

2019年
6月7日
取材



5人に2人以上が国立大現役合格を果たした相模原中等教育5期生。開校10周年を迎え「セカンドステージ」に入った相模原中等を、梅雨入りした6月7日に訪問しました。

高い目標を掲げ最後まで頑張る

「医学の道を志し7名が医学部に合格するなど、5期生は一人ひとりが高い目標を掲げ、6年間頑張り抜いた学年でした」と鈴木恭子校長先生。鈴木校長先生は相模原中等教育の前身、相模大野高校で3年間、相模原中等教育開校から4年間指導され、4年前に副校長として相模原中等に赴任、3年前に4代校長に就かれた先生です。「5期生はまとまりのある学年でした。行事にも一生懸命取り組みました。蒼碧祭では前期課程生も巻き込み、6学年の一体感ある行事を創り上げてくれました」。

「1・2期生の担任をしていたので、5期生を見て思った通りに成長していました」と大河原副校長先生。相模原中等開校準備から相模原中等の歴史を創って来られた先生です。4年間の他校赴任を経て昨年教頭として赴任、今年副校長に就かれました。相模原中等では1年生で「働くって何だろう」から2年生で第一次産業の農業体験、3年生での大学学部学科研究、4年生の自己発見チャレンジでの研究室訪問、企業・大学機関訪問機会などのキャリア教育プログラムが組まれています。「5期生も、将来

を見とおして、この大学といった明確な目標を持って受験に臨みました。このキャリア教育は、6力年教育の良さの一つだとあらためて感じます」。

生徒主体の10周年記念行事を

「11月の記念式典に向けて生徒の実行委員会が立ち上がりました。生徒たちがいるなアイデアを出し合い企画を練り提案してくれています。校長としてとてもうれしく思います」。校内放送を使い「10周年記念ラジオ」を放送したり、10周年マスコットキャラクターやロゴマークを生徒から募集し投票で決めたりと、5期生が創った6学年の一体感を受け継がれているようです。

鈴木校長は「10年を一区切りとするなら、本校はまさに『セカンドステージ』に入りました。10周年は、次の相模原中等を創るスタートです」。

継承と進化のセカンドステージ

新学習指導要領、新大学入試と大きな変化に対し、「セカンドステージ」の相模原中等はどう進んでいくのでしょうか。鈴木校長先生は「新学習指導要領でうたわれる『主体的・対話的で深い学び』すなわち『アクティブラーニング』は、県立中等教育開校から取り組み実践してきたものです。その実践・実績を継承し、さらに発展させていきます」。大河原副校長先生は「大学で最新の指導を学ぶ卒業生が、『これは私が受けてきた授業だ』と思つそうです」。

7期生は新大学入試を受ける最初の学年。英語4技能評価のため英語の外部試験

活用も始まります。「英語4技能も開校から念頭に置き指導してきました。暗唱、ペアワークといった『相模原メソッド』をさらに進化させていきます。もちろん英語外部試験には十分対応できています」と鈴木校長先生。

開校から毎年取材しているからこそ実感できること。それは県立中等教育の教育実践が、これからの新学習指導要領、新大学入試を先取りし実績を積み重ねていること、同時にさらに進化・深化すべき課題に取り組んでいることです。

鈴木校長先生は「かながわ次世代教養」についても「外部機関との連携・活用はさらに充実させていきたいですね。そして生徒自身がどういったテーマ設定ができるか、言い換えればどういった『問い』を立てられるか。『問う力』はすべての教科で重視すべきものだと考えます」。

政府が推進するSociety5.0で活躍できる人材像を、昨年度科学省が公表しました。キーワードは「創造する人材」。答えが1つではない課題に対して、新しい発想・方法で解決を図る創造力は、まさにこの「問う力」から生まれるでしょう。鈴木校長先生は「創造力」について次のように考えていらっしゃいました。

「まずは知識・教養という確かな土台があること。そして興味・関心を持つことが創造力につながるのだと思います。知って、疑問を持って、解決する手立てを考える。ここで大切なのは、一人では成し得ないということ。これからの社会ではますます『チームで成し遂げる』ことが重要になってくるでしょう」。

県立中等教育の入学者選抜に「グループ活動」があるのも、うなずけますね。

ICT活用の環境も整う

「校内のWiFi環境が整い、生徒たちが教室で自分のスマホやタブレットを活用することが可能になりました」と鈴木校長先生。授業の効率や深みが増したり、「eポートフォリオ」の活用がスムーズになったりと、ICT環境は教育現場では欠かせない「インフラ」です。相模原中等ならではのICT活用に期待したいですね。

継承される相模原スタイル

大河原副校長先生の案内のもと授業見学。中等2年生の幾何で見事な授業をしていたのが2期生の教育実習生。生徒をひきつけ「一体感を創るパフォーマンスに実習生とは気づきませんでした」。彼は2期生の中では、特に前に出て活躍するような生徒ではなかったですが、これだけの授業ができる卒業生を見るとうれしいですね」と大河原副校長先生。相模原中等教育の教育



■11期生の教育実習生。生徒との一体感ある授業

成果を目的にした気がしました。

廊下には社会見学のレポートが掲示されています。博物館見学のほかよく見ると「ルミネ the よしもと」。話術や演出を勉強したいという生徒の希望もあり公演を見てきたそうです。相模原中等教育の「懐の深さ」のようなものを感じました。



■中2 社会見学レポート

息づく「教えあい、学びあい」

次に今春入学したばかりの11期生の授業を見学します。理科では前期中間テストの解き直しの時間。なんと、グループワークで解き直しをしています。相模原中等教育が大切にしている生徒同士の「教えあい、学びあい」の精神は、このように培われていくのです。後期課程の数学に教えあいの時間を取り入れたり、大学受験の間際まで「教えあい、学びあい」姿が見られること、それが高い進学実績の背景の一つであることは、昨年の訪問記でご紹介しました。



■グループで真剣に中間テストの解き直し

先生と生徒との距離の近さ

後期課程4年生の授業へ。理科嫌いが増えると言われる物理基礎ですが、ダイナミックな先生の授業が展開されています。笑いを交えながらクイグイ生徒を引っ張っていきます。



■見学していて「楽しい」物理基礎の授業

隣りでは古典。『大鏡』のある場面での敬語主についてグループで討議し、別教室に控える先生に解答。なかなかの難問らしく、数組しか正解にたどりつけていないのか。先生は教室にいないのに、皆真剣に考えているのはさすがですね。



■一人が意見すると、しばし皆で「沈黙思考」の時間が流れる古典の授業

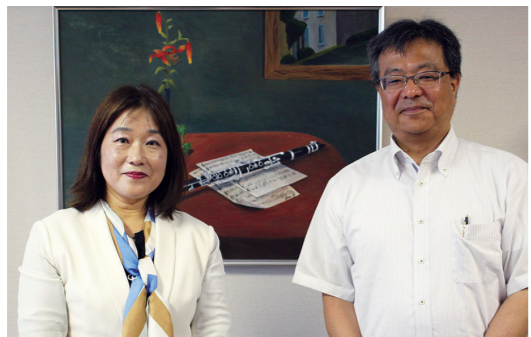
学びでも部活でも行事でも何でも構いません。本校でやってみたいこと、「夢」を持って入学してきてください。そして先輩たちがそうであるように、6年間の学校生活を大事に送ってほしいと願います。学ぶ意欲を持った皆さんの志願を待っています。

本校には実にさまざまな特色があります。説明会や見学会を通してぜひ感じ取ってください。そしてそれらを魅力に感じられたなら、ぜひ受検してみてください。本校は皆さんが充実した6年を過ごせる、本当に素晴らしい環境が整った学校です。



■生徒の解答解説にじっくり耳を傾ける先生

「継承と進化」を掲げる「セカンドステージ」を迎えた相模原中等教育。各教室で繰り広げられる先生と生徒との一体感ある授業、生徒がじっくり考えたり発表したり生徒主体の授業は、まさに「継承」を感じさせるものでした。最後に鈴木校長先生、大河原副校長先生からのメッセージをご紹介します。



県立相模原中等教育学校
副校長 大河原 広行 先生

県立相模原中等教育学校
第4代校長 鈴木 恭子 先生

